

# 学生レポ! 私も 広大です

広島大学を卒業・修了後、各業界で活躍されているOB・OGの方々に学生がインタビュー。現在のお仕事と大学時代を語っていただきました。



## ドローンを使った画像解析を駆使し 現場の課題を解決したい

ドローンを使った高密度測量や精度の高い画像解析を行うルーチェサーチ株式会社を2011年に設立。土木の工事現場や災害時の現場調査などに役立てています。ドローンというと、空を飛ぶラジコンといったイメージしかないかもしれませんが、しかし社会に貢献できる使い道が大いに期待されています。

世の中にドローンが登場したのは15年程前。撮影が主な用途でしたが、約10年前に自然環境に対して技術応用を始めました。新しい市場のため、機体の販売以外で事業化している企業はまだ少ない。その中でルーチェサーチは、世界でも珍しく機体の開発設計・製造から、現場での測量、画像解析まで自社で一貫して行っています。橋梁点検や河川調査、農薬散布など、土木・建築・農業・林業の多様な領域で、開発した機体や技術が活用されています。

近年の大規模災害時にも何度も出動しています。2014年の広島豪雨災害では、国土交通省の要請を受けて現場を測量。2016年の熊本地震では、レーザー測量を用いて地割れを解析し、捜索活動の判断材料を1時間で提供しました。ドローンでの測量は、人が足を踏み入れることができない危険な場所でも計測することができ、かつ調査時間を短縮できるため、災害時の迅速な対応につながります。滞空時間や機体の大きさなど、現場には考慮すべきことがたくさんあります。広島大学との共同実験や、海外のベンチャー企業との共同開発も行いながら、現場の知識を組み込み、本当に必要とされるものを生み出していきたいです。

当社のコンセプトは「現場の課題解決」。現地の情報があれば、これまで足を運んで実施していた仕事が事務所で可能になります。AIやロボットが目目される昨今、業務のロボット化・効率化は重要な観点だと思います。

## 目の前のことにきちんと向き合うことが 将来の学びにつながる

大学時代は総合科学部で学びました。当時は地理学を専攻しながら、自分のやりたいことを探していました。起業のきっかけは、「社会課題の解決がしたい」という思い。ドローンを仕事にしようと思ったのではなく、課題解決の手段の一つがドローンだったということです。

現在でも、営業やマーケティング、技術面など日々学び続けています。今自分に起きていることは、必ず学びや成長につながります。大学時代から、目の前のことにきちんと取り組み、さまざまな経験をしていくことが成功の力ぎだと思います。

総合科学部 出身

# 渡辺 豊 さん

ルーチェサーチ株式会社 代表取締役

わたなべ 豊 / 広島大学総合科学部 2004年度卒業。2011年にルーチェサーチ株式会社を設立。広島と東京に拠点を置き移動体計測、特にドローン(UAV)による地形測量、構造物点検及び三次元解析を行う。2014年8月の広島豪雨災害での貢献が評価され、同年9月に首相官邸でドローンのデモンストレーションフライトを行うなど、業界の先駆者として活躍する。2016年、高精度の地形解析が可能なドローンレーザー測量を世界で初めて実用化し、第7回ロボット大賞(国土交通大臣賞)を受賞。国土交通省の推奨技術認定も受ける。



## Report

学生広報ディレクター

人間の手が届かない部分を補ってくれるドローンは、「孫の手」のような存在だと感じました。常に「現場に役に立つものを提供したい」という一心で開発に取り組まれている渡辺さんだからこそ、西日本豪雨のような非常時でも活躍できる「孫の手」を次々と生み出すことができるのだと思いました。

教育学部4年 貴船 桃佳さん



しんきゅう 千恵 / 広島大学教育学部2002年度卒業。2006年に読切作品『痛快! 堀田クリニック』でデビュー。著書に『タカネの花』『ワカコ酒』など。現在、『ワカコ酒』(月刊コミックゼノン/WEBコミック ゼによん)、『タカコさん』(WEBコミック ゼによん)、『ねこびたし』(WEBサイト ねこねこ横丁)、『居酒屋人めぐり』(中国新聞)、『お酒ハンザイ!』(レタスクラブ)を連載中。女性の一人飲みを題材にした作品『ワカコ酒』は実写ドラマ化され、大きな反響を呼んだ(現在、Season5まで放送されている)。



教育学部 出身

# 新久 千映 さん

漫画家

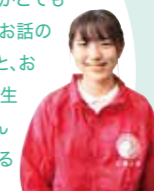
顔写真は非公表のため、自画像での掲載

## Report

学生広報ディレクター

楽しそうに漫画のことを語られる姿がとても印象的でした。また、ほのぼのとしたお話の中からも「漫画が好き」という気持ちと、お仕事に対する熱意を感じました。学生時代に漫画を投稿し始めた新久さんのように、私も夢に向かってまずできることから挑戦してみようと思いました。

総合科学部3年 廣田 香さん



## 夢があるならやるしかない 改めて目標と向き合い、挑戦を決意

子どもの頃から漫画家になりたいと思っていました。しかし一方では、プロになるのは難しそうだと感じており、広島大学の教育学部への進学を選択。社会科の教員を目指していましたが、教育実習が進むうちに熱意ある周囲のみんなとは違い、自分は日本史が好きだけで教壇に立ちたいわけではないと気付きました。その時に思い出したのが、幼い頃に抱いていた夢。本当は、漫画家になりたかった。それなら、行動するしかない、と、在学中から出版社への投稿を始めました。周囲から「正気なの?」と言われ、就職活動をしている同級生の中で、漫画を描き続けていました。

卒業後は、在学中に取得した医療事務の資格を生かして病院の受付事務をしながら投稿を続けました。2005年に上京し、活躍中の漫画家さんのアシスタントをする傍ら自分の作品を出版社へ持ち込み続ける日々。ついにデビューを果たすことができたのは、2006年のこと。医療事務の経験を生かした作品でした。担当の編集者の方に、何度もダメ出しをされて一晩泣き明かし、それでも折れずに「また描くか!」と奮発する。そういったことの繰り返しの末に夢を実現することができました。

『ワカコ酒』誕生のきっかけは、担当の編集者の方の一言でした。「新久さんてほんとお酒好きですよ」という何気ない会話から、構想が浮かんできて。連載を開始した頃は、女性が一人で飲むというのが、ネガティブなイメージだったのですが、主人公の親しみやすいキャラクターが読者の心をつかんだようで大きな反響がありました。一人で無口に飲んでいても、本人はすごく楽しんでいるというのが共感できたのでしょね。さらに、作品を実写ドラマ化していただいたことは大変光栄で、試写会では感極まって号泣してしまいました。

## 自分の作品が、何かを始める“きっかけ” になることがうれしい

漫画の着想を得るために工夫していることは、メモ魔になること。日常で起こった出来事や会った人の様子などちょっとしたことを書き留め、作品の中に取り入れています。人に会うのはあまり得意ではありませんが、人へ会って感性をアップデートすることも大切にしています。

また、読者の皆さんからいただく、「『ワカコ酒』を読んで一人飲みを始めた」「大人になったらお酒を飲んでみたい」といった声が大きな励みになっています。自分の作品が何かを始めるきっかけになったと思うと、うれしいですね。今後も読者の皆さんに共感いただいているところは維持しながら、飽きさせないように小さな変化を重ねて、未永く愛される漫画を描き続けたいです。

先輩の皆さんでやりたいことが見つからない人もいますが、まずはできることから始めることが大切です。それらがいつか、やりがいにつながり、将来が見えてくることがあると思います。